

第4回 「テキスタイル - 建築とファブリック」

講師：安東 陽子（あんどうようこ：NUNO/テキスタイルコーディネーター・デザイナー）

日時：2008年12月6日（土）15：00-17：00 /会場：東京建築士会 会議室

Profile：1968年生まれ。武蔵野美術大学短期大学部 グラフィックデザイン科卒業後、NUNO(株式会社 布)に入社、クリエイティブスタッフとして勤務。現在、テキスタイルコーディネーター・デザイナーとして、伊東豊雄建築設計事務所「せんたいメディアテーク」「まつもと市民芸術館」「多摩美術大学図書館(八王子キャンパス)」、青木淳建築計画事務所「白い教会(ハイアット・リージェンシー・オーサカ)」「SIA青山ビルディング」をはじめ、山本理顕設計工場、隈研吾建築都市設計事務所など多くの建築家、デザイナーの方々にテキスタイルを提供した実績がある。

コーディネーター：城戸崎和佐(京都工芸繊維大学デザイン経営工学部門准教授)



第1部：空間と響きあうテキスタイルの可能性

「テキスタイルを空間に使いたい」という建築家からの依頼に、2,500以上のオリジナルの中から、あるいは新規デザインを起こし、その空間にふさわしいテキスタイルをコーディネートする安東さん。今回は建築家とのコラボレーションの実例を通し、「建築とファブリック」についてご講義をいただきました。

布と空間が新たに生まれ変わる瞬間

-すみだ生涯学習センター / 長谷川逸子・建築計画工房-

現場にカーテンをかけた瞬間、その空間がテキスタイルによって変わり、自分の手から離れて空間をつくり、ひとり立ちをしたような感覚がありました。

建築の空間にかかる、光や周りの空間に影響を受けることで、**生地が違うものに見える**んです。それと同時に、その空間に対し存在感を持ち、影響力を与えるといった両方を持つ。とても新鮮な感覚でした。それが強く印象に残り、空間に関わるテキスタイルの仕事がしたいと思うきっかけになりました。

建築空間をつなぐ美しくゆたかな色づかい

-まつもと市民芸術館 / 伊東豊雄建築設計事務所-

「赤ワインのもつ深く美しい色合いと、芳醇な味わいをイメージするような**赤のグラデーション**に。伊東さんの持つ大ホール観客席の椅子のイメージは、このような表現でした。80~90色で生地を試作するなど、1年間程度試行錯誤を繰り返して、最終的には10色の生地を使用しました。美しく規則的なグラデーションではなく、次の次の席の色に飛びうつっていくような、軽やかでポップな表情を見せる楽しいグラデーションの色遣いになりました。

自立する布

-ONE表参道 / 隈研吾建築都市設計事務所-

2日間限定、オフィスビルの内部にパーティ会場を創ってほしいという依頼。当初はカーテンレールを使う予定でしたが、より繊細な空間を創り出したいと思ったので、オーガニックの布を「虫ピン」で天井に留めるアイデアが浮上、その案を試してみました。

布地は、支える何かが無いと立ち上がらない素材ですが、この空間の中において、まさにイメージ通りの立ち上がり方をしてくれました。布地は**展覧会など短期間のイベントに使う素材として適しており、工夫次第で可能性が広がる素材**といえます。



第2部：対談 「建築とファブリック - コラボレーションを通して -」

聞き手=藤原徹平(建築家/隈研吾建築都市設計事務所設計室長)



「建築業界のボトムアップを図りたい」と語る、隈事務所のエース藤原徹平さんと安東さんの対談がスタート。まずは第1部を終えて藤原さんの感想から。

———建築界はここ10年間、安東さんによって支えられてきたということに改めて実感した。最初に一緒させていただいたのはL Vの仕事。6階のホールに入った途端、ひとつのボックスの空間に包まれた自分の感覚というものを、すごくときどきするくらいに感じた。その感覚をちゃんと表現できる「空間に力」というものに、強い感動を覚えたんです。僕は、実際に仕事を始め、安東さんが関わった空間に出会っていくことで、「**身体的に建築的のいい空間**」は何なのかを考え、勉強していった気がしています。

———印象的だったのは、アルミと人をファブリックでつなぐSUS(SUS福島工場社員寮/伊東豊雄建築設計事務所)。建築空間を人が生活するためにふさわしい柔らかさに変えていくことを感じられる体験が、とても面白いと思ったのですが、テキスタイルによって建築空間が根本から柔らかくできてしまうと感じたのはいつからですか？

SUSは、自分の中で初めて**空間とテキスタイルが一体化**できた、と感じた仕事です。ただ、自分が関わって自分が何かを変えた、空間になったと考えたことはないんです。しかし、テキスタイルという素材が、その他の素材と同様に、空間を構成する**素材のひとつでありながら、他の素材よりもバリエーションの自由度が高く、また素材自身の持つ視覚的感覚だけでなく、それを見て何かを想起するような、表情ゆたかに空間を表現出来るもの**なのかもしれないと感じています。

———プロジェクト・人、何を見ながら仕事をしますか？

その人が何を考え、どういったものを創りたいかを考え着地点を見つけていきます。私が好きなものをつくるわけではなく、その**空間にフィットしたものの、最善なもの**を考えるのが私の仕事。その現場なり周囲の建築に関わる方々が、コンセプトを共有しつつ**布地を素材として必要だと思ってくれることが大事だと思っています。**

藤原徹平（ふじわら てるへい）/建築家/隈研吾建築都市設計事務所設計室長）1975年生まれ。1998年横浜国立大学工学部建設学科卒業、2001年横浜国立大学大学院博士課程前期課程修了。現在、隈研吾建築都市設計事務所勤務。2008年から横浜国立大学工学部建築学科非常勤講師。

